

毎月一回十五日發行(定價一部五錢一年郵稅共五十錢)



二 圭 田 須 兼 輯 編  
市 田 上 縣 野 長 人 行 發  
校 學 門 事 絲 蠶 田 上 所 行 發  
會 町 縣 南 市 野 長  
社 會 式 株 關 新 日 毎 信 所 刊 印

山本三郎著  
化學純絹絲の工業的完成  
伊太利蠶絲絹業の衰退原因と其の現況  
蠶絲業法規要論  
市田上縣野長 所行發  
會究研學科絲蠶 (振替長野0413番)

### 開港拾遺集(一)

横濱 正木 章三

生糸貿易發達史を調べるにつれて眼に觸れた横濱開港沿革史の中から拾ひ出した物語を、極くナンセンスカルに書き集めて見ませう。

#### ◆曲録借り集めの事

久里濱に於て浦賀奉行の戸田伊豆守が、江戸の閑老に伺ひ濟みの上、ペリリを應接したのは、嘉永丑六年の六月の九日の事でした。一夜造りの濱邊の應接所とは云ふものゝ、間口十間奥行五間、中頃に仕切を置いて五間四方の土間を二ヶ所造り、一方の間には床を張つて應接所に當て他の一方は床無しに砂丘に直に薄縁を敷いて警衛所としたとの事です。

このペリリ應接の時は、椅子のみで卓が無かつた。いや椅子と名のつくものさへ無かつた頃の事ですから、腰を掛けるものを床几と稱して居つた。

所が、初めにペリリの船に呼ばれて行つて船内を見た人々の話では、卓も椅子も頗る立派なもので日本の床几等とは比較にもならぬものだと云ふので、この應接所の床几に

就いては随分工夫をした様です。苦心焦慮の末遂に考へ出したのが、寺僧の葬儀の時に使用するアノ曲録だつたのです。

早速に地役人及町村役人に命じて各村の寺と云ふ寺から曲録を借り集めさせましたが、何しろ新しいものとは無く、何れも破損したり、所々漆が剝けて居ると云ふやうなものばかり。之では幾ら何でも用ひられぬと云ふので直に修繕をするやら、赤漆の剝けたのは紅殻を塗り、黒漆のには墨を塗り、又毀れたのは大工が鐵釘で打ちつける等、徹夜で漸く人の掛けられる迄のものに仕上げたと云ふから愉快です。

之を奉行側に三脚、使節側に十脚を配置して、ペリリ以下の一行に備へた。この時の奉行側の三人は、戸田伊豆守、井戸石見守、奉行支配組頭の三人でした。浦賀奉行の戸田氏の使用したのが、朱塗で最も美麗であつたとの事です。これは野比村の最寶寺(三浦郡北下浦村)の曲録だつたとの事です。

#### ◆八陣の備の事

ペリリの黒船が浦賀に碇泊して居ると云ふので房總方面の大名達は、漁船を以て黒船と勘ふ計畫を立てた

り、百匁筒の大砲を備へたり豪い騒ぎであつたとの事です。

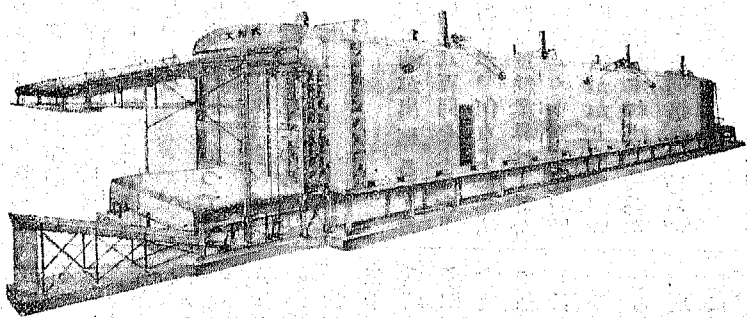
この八陣の備と云ふのは、兵卒、物頭、番頭、本陣船等より成る八隻の船を以て、敵船を圍み漸々に鷄の羽根を緊める様に巻き込んで之を擒にし或は撃沈すると云ふ趣向のものだつたとの事です。尤もこの下稽古は小舟をもつて行ふので、風波の荒れる日は出来ない譯で、天氣の好い日待つては習つたとの事です。さて肝心のペリリの黒船が房總の岸近く來た時には風が大變に強くて、常日頃稽古した八陣の備で鷄式にやらうとした所が、風に吹き飛ばされて見る影も無く、八陣やら九陣やらあつたものでは無かつたとの事です。今では笑ひの種ですが、當時は随分氣を揉んであはれた事と思はれます。

そこで仕方なく旗差物は倒して船縁に縛り付け、備へを崩してペリリの軍艦の影に風を除けて小さく集つて居たそうです。

所が、軍艦の甲板から双眼鏡で小舟を覗下したとの事で、之には參つたと記されてあります。

外國人共が双眼鏡を以て見下すに依りて決して見苦しき風を爲す可

### 現代乾蘭機界ノ王座 大和式自動輸送乾蘭機



1933年代表型

【別録附呈】

製作發賣元

株式會社

大和三光商會

東京京橋區京橋三丁目二番地

電話 京橋(56)五三二〇番

營業課目

特許大和式自動輸送乾燥機  
特許三光式乾燥機  
特許川崎式乾燥機  
特許大和式熱湯自動還元機  
特許大和式改良ロールセー  
特許水野式改良ロールセー  
特許アイエム・コールセー  
特許アイエム・ストーカー

らず、第一陣羽織を脱ぎ、脱剣す可らず。船中にて箕踞す可らず。之では船中の士達の不自由、邪麗さ加減は並大抵では無かつたであらうと察せられます。

#### ◆祝砲三發の事

之はペリリの出帆する時の事です。が、祝砲の爲めに人民を驚かしでは氣の毒と云ふのでペリリ側からは……

是は國々交際の禮儀なれば祝砲は空砲を撃ちて歸へる——と傳へて來た。

大砲を撃たれるのは迷惑千萬だが、禮儀とあれば致し方も無い事で御座るから三發だけ許すと捉めて、若しそれ以上發砲する時は直に兵端を發して打拂ふ可し……と云ふので、若侍共が海岸や小山の上の見物しよい所にて注視する事になりました。

そこで徒歩の侍士等は軍艦の様子を望見して居ると、やがて撃ち始めたのです。

一發、二發、三發と算へて行くと既に四發目を打つた。

それ！ 各々の方、四發目だ！  
——と云ふのでその趣を、馬を飛ばして注進すると云ふ騒ぎ。すると又一發。

それ！ 五發目を打つたぞ——  
馬を駆けさす者上を下への大混雑を来し、一方では砲台に使を走らせ、三發以上打つたからには直ちに打拂へと命するやら、いやもう六發、七發と打たれるので、いよいよ騒ぎは大きくなり、人民は右往左往に逃げ惑ひ、狼狽を極めたとの事です。而かも砲台へ走つた使者が到着せぬ内に、十發余を打ち終つた彼等は、黒煙を空に漲らして白波を蹴立て、安房の州の崎の鼻を廻つて、遠く大洋へと乗り出して行つて仕舞つたとの事です。(續)

八・五・二七

### 花から若葉へ

碓氷 茂

花から若葉へ。  
いま都は花から若葉へ衣更へをしめてゐる。追がに春はいゝ。今日は祭日だ。(四月二十九日で天長節)。電車殊に省線電車は春を樂しむ人達で大混雑を呈してゐる。電車といふ電車は何れも春を樂しむ人達によつて占有されてゐる。

飛行機が都の空高く飛んでゐる。それが郊外からよく見える。いくつも飛んでゐる。揃つて飛んでゐる。消えて了つたやうだ。

前の森が若葉をつけてゐる。柔かい、しかも薄い若葉を通して光が美しく光つてゐる。僕はいま疊の上へ寝轉んで原ツバの上を通る春の風を

親しんでゐる。子供が原ツバの上で遊んでゐる。

×  
自轉車が通る。ゆつくりゆつくり通つてゐる。やつぱり春だ。

×  
ヒットラーが猶太人教授を蹴首してゐる。アイン・シュタイン博士はもう獨乙へなど歸らぬといつてゐるさうだ。

×  
太陽を東へ呼び戻す政策、果して如何なる光景が展開されるか。次の幕の開くまで暫時待たう。

×  
それは西の國の話だ。東の國では極右系が左翼撲滅大會を開いて氣勢をあげてゐる。

×  
失業した舊知がやつて來た。すっかり生活のために憔悴してゐる。仕事を失つてゐる。そのことよりも、その日その日を生きることが先決問題らしく見える。仕事を見つけないやうに話しても話に乗らない。それよりも、今日のことをどうしたらいいかと相談する。

×  
その日のことを相談されると僕も參る。僕自身が既にそれなのだから如何とも手の下しようがない。さりとて追ひ返すといつたやうな手荒なことは勿論僕には出来さうもない。結局どうすることも出来ぬのだ。止むを得ない。歸つて貰つた。そのうちに又來るかも知れない。來て呉れても僕には君を助ける方法がない。

×  
君が電車賃を出して來て呉れても、僕にはそれに報ゆるだけの力がないのだ。せめて來て呉れないこと

を僕は心のうちに望んでゐる。同時に君がめつたな行爲に取りかからなことを望んでゐる。

×  
超常識といふのがある。常識を通り越した常識といふ意味だ。非常識の意味ではない。徹底した常識といふ意味だ。「人を喰つた人間」の常識といふのがそれに近い。

×  
急に暖かくなつた。蚤がひよこひよこ飛び出して來た。蠅も蚊も出て來た。今迄欲しかつた外套が急に不要になつた。それもその筈だ。もう早場の蠶は上簇する頃だから。

×  
何だか今年は簞棒に忙しさうだ。一年一年忙しく暮れて行くが、今年には特にそれを思はしめるものがあるやうだ。

×  
郊外の俺の巢の近くの畑では麥の穂が大變長くなつた。微かに吹く風になよなよと伸びてゐる。一日たつと一寸位は伸びるものらしい。僅かのうちに大變成長した。

×  
今日五月九日事務所の引き越しをした。牛込から有樂町へ。トラツク一台で總てが移つて了つた。尤も四つの身柄だけは圓タクで運んだ。「移るのだ、移るのだ」と思つてゐれば氣掛りだが、移つて了へば落ちついていゝ。これからは蠶絲ホワイトハウスの生活だ。

×  
ヒットラーの踊りは益々續く。今日(五月十二日)の新聞(讀賣)は次のやうに報じてゐる。

「ドイツ國粹社會黨の「非ドイツ的」著書焚刑は十日午後ベルリン日抜の地點國立オペラ劇場前の大廣場に於て大群衆の面前で舉行された。ドイツ文獻清掃運動に狂奔する黨員學生團は各國粹社會黨の制服に身をかため「宿命づけられた」非ドイツ的著書文獻をうづ高く車に積上げて廣場に持込み嵐のやうな拍手喝采裡に一々著者の名を讀み上げ乍ら次から次へと世界的名著を惜し氣もなく焚刑に處して行く。

この焚刑の厄に遭つた著書の主なものはマルクス、レーニンの社會文獻を初め佛のバルビュス、米のアブトンシンクレア、獨のルードウィヒ等の左翼的作品、レマルクの「西部戦線異狀なし」、ヒルシュフェルド博士の性科學に關する文獻などである」

×  
西の國に始皇帝が出來かかつてゐる。これから万里の長城を築くかもしれない。まあ黙つて見てゐることにしておこう。

×  
そろそろ早場の繭が出廻るやうだ。生絲の相場は八百圓を上つたり下つたりしてゐるが、何れにしても悲觀し切つてゐる蠶絲業界は、幾分元氣がある。勿論アメリカの經濟狀態を考へると頗る氣がかりだが、昨年の春蠶時代に比較すれば、蠶絲業界に元氣のあること何倍かである。

×  
此の頃の省線電車は、小學校の子供の遠足隊で盛り上つてゐる。おかげで電車通勤者は混雑するので閉口だ。

だが、初めて東京を見る彼等の小さな魂のよろこびを見てゐると、混雑の苦痛を忘れて了ふ。

### 淺雲錄

曲 千 生

#### 二、綠陰慢語

#### 一、學校の新綠

初夏の候に母校を訪れた者は誰でも樹々の著しい成長に驚異の眼を見はらないものがあるまい、そして口を揃へて清新な深緑を讚美する。開校以來余り長い歴史でも無いのだがよくもこうこんもりと繁つたものである、まるで大小の建物を深緑の海底に埋めた如うな深さと静寂さである。

一休信州の新緑には特異な感觸を覚えしむるものがある、斯う言へば澄んだ空、明るい陽、芽えた青葉等の爽快な初夏を追憶するであらふ、かゝる鬱鬱たる一塊のみどり其のものが現在母校の姿である。

昔しと云へば舊いやうだが兎に角二十年前此の學校が此所へ建つた當時はここ等界限はたゞ見る一面の桑園でしかなく、從て樹らしい木は一本も無かつた、學校が建つて初めて今日の殷盛を招く種子が播き下ろされたのである、だから開校二三年間の殺風景さと來てはお話にならない程であつた。

夏のこと、煙突の鉄打ちが見るからに暑そうな煙瓦造りやペンキ建の上でカーンカーンと鳴らせる響きが裸地を渡つて教室に懶うさうに響く、このひだるい金屬音を聴いたものが如何して今日の潤いある學校を

想像出来やう！其の當時の緑と云へば未だ植ゑつけられたばかりの桑園だけであつた。

かうしたやうな原つばに現在のオアシスを創造した原動力を尋ねると針塚校長の理想を顕現せしめたものと答へ得るであらう。

緑は平和の表徴である、生命の泉である、青春の意氣である、理想の光りである、先づ學舎を造つて科學の殿堂を築き上げ、之に緑樹を配して情操の源泉となし智育德育の渾然たる融和を計らふ——と云ふ大理想が若い校長に炬の如く燃えて居た、此のために遠き將來を期する植樹に全力を傾注されたのだ、樹木の寄附は喜んで受けた、卒業生も卒業毎にくばく植樹を記念に残して行く、職員は職員で度々寄附をする、何等かの記念事業と云へばミナ植樹である、校長の旅歸歸へりに持ち歸へられた樹もかなり澤山ある。ピクニックの途中ポケットにしのばせた苗が今は篠突くばかりの大木になつて居る話も面白い。

だが實は校長の理想としてよりも針塚先生の趣味——性癖としての方がより効果的であつたかも知れない、先生の生物を愛好する程度は超人間的なものである、就中植物を最とする、如何なる植物でも靜かに其の生命を愛しみ成長を樂しみ、哲學をさへ見出し花の美醜果實の甘酸等は殆ど問ふ所でない、之に就いても却々面白い逸話があるが他日に譲る、尙此の事業に深い同情と趣味を有ち、校長の意を受けて、或は率先して愛護培養の任を完了した恩人として教務の竹下文英氏を紹介して置か

う、こんな鹽梅に學校全体が精魂を盡して育てあげたのであるからどの樹にも夫々思ひ出深い追憶を宿すと云ふものである、果樹等にまつはるユーモラスに至つては抱腹絶倒の喜劇があるが之も追つて紹介して見たい。

既に角新緑の機を捉へて次回から樹木の由來を書いて見やう。

### 入社所感

志賀 覺

通常着を脱ぎ捨て第一装束乃至第二装束に容姿を整へ「壽司」を腰にしてわざ／＼遠く郊外に出て所謂「櫻狩り」をやらなくとも、敷居を半歩踏み出せば到る所櫻花爛漫として春風に其の香氣を放つを見る山育ちの上に、あの清浄なる千曲河畔に三歳の開書を書いた、混り氣の無い素朴な田園生活を通して來た自分にとりて何たる皮肉ぞや、東京の眞中で算盤と終日首つなぎするとは！

何一つとして人工に依らざるものとて無き自然を摩殺した寄木細工で凝りかたまつた東京の生活を始めてから早や二ヶ月を過去に流して來た。

けれど日一日として土に親しむと云ふ詩的情緒に浸る様な落着いた氣持にはなれなかつた。

一つはこれまで比較的自由な學生生活に長い間馴らされて來たのが急に斯ふした戦場裏に立つ生産的仕事に従事した事にも原因されては居るだらうが。

然るに近頃漸く會社の經營方針、目的、事務、會社獨特の固有名稱等をいくらか了解し始めて來たが爲め

に己が負擔されて居る仕事に興味を感じ作業強度には變り無くとも心のゆとりだけは持ち得る様になつた事は事實である。

實際四月から今日迄二ヶ月間は馴れない上に余り多くの仕事を手廣く取扱つたが爲めに或時には自分として取り柄の有る點は「健康」唯一つと思つて居たその「健康」にさへ故障を感じ様とした位で長年間に育み慈しんでくれた深海に勝る恩師の方々或は懐しき同窓の友人等一片の禮狀をものする氣持にもなれなかつた。

然しそんな氣持で居れば己の満足すべき心のゆとりなるものは永久に發見されそうにも無いと云ふ人生の眞理(?)を體驗した様な氣がするので前述の如く少しもゆとりを感じた現在思切つて拙筆をとつて懐しき同窓の人々に心から語りたいと思つたのである。

と云つて別に大書する様なニュウスの持合せとて無いので入社以來現在に到る生々しい、初心々々しい幼児に似た己が足跡を紹介したく、たどる事にした。

四月一日！櫻花咲き初る頃で帝都の空も春日和の上天氣だつた。

此の日こそ自分の一生にとりて忘れ難い入社當日であると同時に又失敗の初日として終生赤面すべき日はなつた。

そんな事とは露だに知らず別に縁氣をかつぐ様な非科學的な己でも無かつたが萬事に落度の無い様にと、洋服の着替へに到る迄で細心の注意を拂へば拂ふ程、妙にかたくなつて所謂緊張の度は増して行く。

蓋、過去に於て経験した中學専門學校の入學試験も此の日の心理状態に比すれば物の數でも無かつたらう。

自分の一生即佛座に歸る日まで歩いた足跡が如何なる關係式にて表示されるかは豫測出来無いにしてもそれがたとへ直線とならうと曲線にならうと座標の原點となる日こそ「今日」では無いが。

### 暑中見舞 廣告募集

例年の如く千曲時報七月號に暑中見舞廣告を掲載いたします。廣告料は本年度は特に一人につき五十錢と致しました。御希望の方は左記御承知の上御申込下さう。

記

- 一、六月末日までに到着する様千曲時報編輯係へ端書にて御申込下さる事
- 二、廣告料金は千曲會の振替即ち東京四三三三番へ暑中見舞廣告なる事御明記の上御申込下さる事

斯ふした意識が強く心弦に觸れたが爲に、結ぶネクタイは異様に戦き初め兩手は熱い血潮の流れを感じ却々にネクタイの尾片は揃はない。

鏡の前に彼此二、三十分たゞづんだ後漸く家を出て上野から省線に乗る、時あたかも八時で勤人の波で車中は例によつて身動きだに出来ぬ混雑男女七歳にして席を伺うす可か

らずの古言も此時だけは無効力で眩い様な洋装の麗人とさへも御互の着物を境にしたままで向ひ合せの光榮(?)に浴し得る時だと云ふはあながち好色人のみならんやである。

やがて東京驛に着く、人波みに押し流され玄關口と反對に裏口の八重洲橋通りに出る、此處で同級の五君K君A君と待ち合せる事にしてあつた爲めに三君を待つ。

前後して三君來る。

三君の面々も日頃の朗らかさに代つて又何んと緊張そのものだつたらう。

入社時間九時とされてあつたそれ迄に約四十分程有るが早く來たが爲めに苦情の出る筈も無からうと足並み揃へて會社の前迄來たそうしてエレベーターにて三階に昇つた。

嗚呼！吾等遂に來たれり。

否來て仕舞つたと云つた方が適切かも知れぬ何故かならば驛から會社まで殆ど無意識に歩いて來たのだつた。

自分は生來妙な習慣がある恥しい事には何か落着かぬ事があると必ず便所に飛び込む而して体中より排泄すると何處か所謂落着を得るのである今も例によつて早速便所に飛込む。其處で充分と落着を養つた。そうして先づ來意を先聲吉田氏に告げる次いで竹本氏も出て來る此處で親しい挨拶を交す兩氏は肉身の弟の様に喜び歡迎してくれ何やかやと御世話してくる。

先聲とは云へ斯くも親切に御世話下さる兩氏の御厚意に感謝すると共に兩氏の側で永く働こうとする自分等は幸福である。

やがて給仕が入社式を始める報せに來る。

一行四名先輩の案内で重役室に入らうとするや會社の人々の視線は一丸となつて吾々に集中された。

學生時代遅刻して授業時間中教室に這入つた時クラスメートより向けられる視線は、親しみと微笑に満ちたものだつたがそれは又何んと無愛想な顔して深刻人を射ると云つた風なものに、さうかたぢろがずには居られ無かつた、重役室に這入つて見ると重役、支配人、庶務、經理、作業、原料各課長ずらりと並んで居る丁度入學當日學生課のいかめしい教授連の立合ひの下で校長の前にて誓宣式を舉行する風景に似た所が非常にある。

入社に當りての訓話がある、支配人の激勵の言葉がある終りていよいよ出勤簿に最初の捺印をなすべく命ぜられた。

此の時である……仕舞つた印鑑を忘れたのである、忘れた事に氣付くや立つて居る足がぐらつと一ゆれした、血潮の流れが一時に止つた様な氣がした目の先が暗くなつた、幸にも自分が一番左端に並んで居た爲め捺印は右のK氏より始つた。

「一秒二秒……一分……」右隣のM氏の捺印も終つた遂に自分の番に來た。

萬事休す、神よ佛よと思つたが早や追付かない、え、仕方が無い……

「あの……」

「何だネ」「僕まだ印鑑持ちへて有りません」

瞬間妙な沈黙が生じた。

「そうですかでは早速電話で造らせましょう」

「済みません御願します」

「ではで、一先入社式を終へた事にします」

課長連申退場す、自分の体は冷たい汗がにちみ出て手はしつつかと握りしめて居た、ホット一息ついたもの、自分を顧る時何と云ふあわて者だつたらう。

ネクタイ許り氣を付けた結果がこれだ。

「頭かくして尻かくさぬ」とはこの事か？

縁氣でもネ……斯くして月日は流れた、そんな事もあつたつくと云ふ風に。

然し毎朝出勤簿に捺印する度毎に當時の事がまぎ／＼頭に浮び出て人の知らぬ氣苦勞に赤面して居る。こんな有様では出勤簿見る度毎に一生赤面しなければなら無いたらうか。

情無い事では有る。

窓から歩道を眺めると靴磨き屋がいつの間にか並木の葉蔭の下に移轉して居る。

葉蔭を慕ふ頃早や初夏の訪れか。同窓の諸兄よ健在なれ。

(一九三三・五・二三)

## 大島伊豆の旅

一 集合 吾 人生

夫れ人生は喘ぎの連鎖とかや。骨肉を蝕む寂滅の死の都に物欲の懊惱は去りやらず。そこで——常春の香波に鳴る想ひの旅せんとすだ。一行九名の息抜き旅日記である。

九名中、上は官制農林技手より下は其他雇員まで。出發に際し僅か一夜の獨り寝に久遠の別離の哀愁をこめて水盃を爲すものあれば又一面何と悲しき現實よ、別れを告ぐる者として無く、僅に食券に惜別の情を傳へて離岸島に集るあり。結婚と葬式、其以上の出發に際しての感情の距離。

「おーい皆集つたか。」

これは獨身部長兼幹事長殿。

「一人來ない。」

「誰だい。」

「關稅氏だ。」

「仕様が無えなアもう菊丸は駄目だぜ、惜しい事した菊丸には銀座會館の女給連中が乗つたんだが。」

「えッそりや眞んとかね、九人に一人の犠牲は止むを得ざる所だ、未だ何とか乗れるだらう。」

「直ぐそり來るだらう。獨身者は御し易いがしかし相場氏だつてこれを知つたら來さアなるめえに。」

斷つて置くが幹事長は信州の産で時次郎の分子が交つて居るのである。

「今頃何をして居るでせうね。」

暫く空を眺めて居たグラフ氏一寸感傷イズムになつたらしい。

「おうさ、今頃は二尺一間の玄關でこれ妻女、三年前のあの木曾路の旅に較べりや今度は僅か二日の短い旅にやあるけれどなにせ頼り無え船旅だ。一緒に行くのが皆愚郎だから——でもよ心配するにや及ばねえ吃度無事で歸つて來るから、それよは猫でも膝に乗せちやならねえぞ、」

とでも言つて居るだらう。

「そうですかね……」あ、獨身者は何故待たねばならぬのでせう。グラフ氏は今や完全に釣られて樂しかるらむ新婚の夢を追つて居る。「こりや君好い種だ。年中赤字公債無刺戟の吾々旅行會にとつてこりや逃さすべからざる収入科目だ。」こりや君だのは會計氏。如何にす

## 稟告

例年の如く七月一日現在にて千曲會々員名簿を編纂致したいと思ひます。就きましては御多忙中誠に恐縮と存じますが昨年七月現在の會員名簿に訂正を要するもの(其後千曲時報住所移動欄にて訂正せしものは御通知に及ばず)は此際至急左記事項千曲會動靜部宛御通知し下さい。

### 記

- 一、前任地
- 二、新任地  
(特に自宅併記御希望の方は(自宅をも報告せられたし)
- 三、卒業又は修業年度別
- 四、姓名
- 五、改姓、改名又は本籍地の移動等

## 千曲會動靜部

れば收入を増加し支出の増加を可能ならしめ、然も一般會員の割當徴收額を最少限度に止むを得るや。これが會計氏の痛であつたのである。「随分の人出だなア。」「皆行くのだらう。そんなに良い所かな。」

「良い所なんだらう、死に度くなる位だから」御冗談でせう、景色が好いと死に度くなるかね。」

「なる、人間は元來自然の子だ。自然の最も美しさがその人の親だ。あゝ、景色だと思つた時その心は親に通じて子を呼ぶ。これは當前の話だ。」

「呼ぶのは構わないけど死ななくていいぢやないか。」

「そりや君、最悪の場合だ。」

「と云ふと」

「早い話が紅燃を盛る林間を散策し自然の美に感動して自然の懷に歸らんとし落葉の中に身を横たへた所で死にはしない。三原山で感動したのがその人の不幸であつたのだ。火口へ身を横たへたのでは必然的に死ぬより外にない。」

「だつて大概初めから死ぬ氣で行くぜ」

「うんその場合はボスターに感動したんだ。實行がつまりモロッコの片道切符となるんだ。」

一八條氏と共同氏が閉つぷしに御冗談でせう的自殺論をやつて居る時刻の収入科目氏が息も荒くやつて來た。

「やア罰金々々」

「待つたぜ」

「おごるのは覺悟の上だらうなア」

「唇がはれて居るぜ」収入氏も四面楚歌に覺悟の上とは言ひ乍ら果然自失の有様である。

「おい幹事これで皆揃つた理なんだが今度は何丸に乗るんだい」

「菊丸は駄目。桐丸かな」

「兎に角出札口に竝んで居た方がいいだらう」



「幹事代表して九人分とねえかな」とも駄目だ。何しろ中には初めから死ぬ気で行く奴が交つて居るんだから殺氣立つて居るぜ。道伴れになりたく無えや」

「皆で行つた方が安全だらう」

「よう！ 安全主義賛成！」

見れば會計氏。噫呼妻は斯く迄夫の神經を細密にするのか。この身、我がものにして我がものに非ずか。集合する時、困るから旗を作るんだなア

「絹製で紺に染めて白で浮出すんだ。」

N氏とH氏

「絹ぢや高いぜ」

「蠶絲局で木綿なんて使つたんでは具合が悪い。寄附させるさ」

「するかなア」

「するさ。宣傳になる。風に靡き具合だつて木綿なんて問題にならな。一眠見て絹は好いなアと頭に浸込む。作るなら絹と云ふ事になりや生絲の需要増進販路擴張の第一歩だ延びて商人の利益だ。旗布の一枚や二枚寄附したつて依つて増加する將來の需要を思へば大事の前の小事だ。」

「まるで振興演説だね 寄附させるならそれに越した事は無いさ 寄附は貴ふのより安い。」

「何故だい」

「貰つたんでは御返しが必要。」

「考へてね」

「そうさ 相談づくで費用の要らぬ様に三原山へ行く世の中だもの」

「でも引取りに行つたり何か費用はより以上かゝるぜ」

「あれは新聞の効毒論に問ふべきだ

よ。」

「は、ところで旗位でそう儲るかね 蚊の佃煮を造る様な話だが」

「いやそりや見當違いだ 冗談は叔於てこいつは一寸意見になるがね」

今官民協力で何か新しい捌口は無いかと鰻の穴でも見付ける様に努力して居るが勿論今からだつて大いに有益な事だがもしその探す時に當つてだね一度に十匹も二十匹も得やうとしたら一寸駄目な話さ。奴等に共同生活精神なんてのは無いんだから。生絲の消費國を探すに上つて同じさ。須らく鰻の穴を探す以上に目を見張る必要はあるが同じ様に見える石垣の穴の總てを見落しちや駄目だ。一つ一つつまり話が前に戻るが旗でもハンケチでもだ使へ相のものぞん／＼狩集めるのさ。」

「そこで君の需要増進の宣傳から旗の寄附と云ふ事になるんだね」

「まあそうさ。こいつは無茶な言方だつたが要するに需要増進を奇抜に求める弊に落入るなと云ふのさ。」

N氏もH氏も疲れた様である。然しさすがに偉いもんだ。休息にも生活の種を忘れないんだから。」

幹事長が

「俺の後に續いて来い」

と云ふので九人一列となつてひた押しに押して行くと改札口の所へ来てしまつた。然も一番から九番までつまり今度の乗船はトツと云ふ事になる。

「ど豪く混雑したものだなア」

と一八條氏H氏と乾蔵倉庫氏の間で息張つて居る。自分が

「こつちへ来ないか」

と云ふと

「行きてえのは山々だが」

と四方を見上げて居る。人間は相手が自分より三寸も大きいと聳え立つ斷崖にでも突衝つた氣持になるらしい。

後を振り返ると男女入り亂れて改札口の開くのを今や遅しと待ち受けて居る。その面たるや實に奇又悲。羨しい様に吾々を見るその眼付。大島は將に神宮球場である。

「今度出るのは何丸ですか」

「菊も桐も満員ですから今度は紅梅です」

幹事長は群衆を代表して聞いて居る。答へて居るのは種栗頭の眼のギョロツとした道鏡を思わせる様な事務員である。

「紅梅丸と云ふのは何頃位ですか」

「3000トです」

「菊丸は1200トです」

「今度は馬鹿に小さいんですね 大丈夫ですか」

「その點御心配無用です 小さいとは言ひ乍ら八丈道で餓へられた船ですから」

「船でも荒海で修業を積むと強くなりますかね」

「いやどうも そろいふ理でもありませんが沈むなんて……その點保險付ですから」

「沈むでもない様に保險つけてるんですか」

「は、ハ元談許り」

「いやア迂闊には乗れませんよ。命にはお替りが無いんですからなア 桐丸はどうです」

「あれは800トです」

「大きいですか」

「でも駄目ですよ、半貨客船ですから」

「だつてさつきはいゝ様な事を……」

「え、さつきのお客さんは急いで居りましたし、それに後が込合ひますから」

つまり先程までは半貨客船の桐丸が一番よかつたのである。その一時間前までは菊丸でなけりや船でなかつたのである。今は紅梅丸が一番よくて菊も桐も駄目なのである。

凡そ情ない船ではある。

二 船底にて

淺草の映畫街に八時が来たのと同じだつた。淺草の場合は何故割引は定員を越してもかまわぬか？

であるがこの場合島に娘は幾人居ますか？ と極めて置きたくなる。

もつとも文獻に依れば「島で育てば娘十六戀心」である相だから率からゆくと多いかも知れないが……この人出では樂觀を許さない。所詮死苦しみの飛躍をせねばなるまい。

船室は勿論各等に別れて居る。三等が又二箇所に別れる。上段と下段に。上段は稍々水平線の上にあるが下段は曉の太陽と同じで水平線以下である。この區別は勿論船に乗るべく支拂つた金額に依つたものでは無い。全くの實力の相違から來たものである。ラグビーのチャンは上段。ピンボンのチャンは下段。そんな調子である。

我々一行が泊り得たのは下段である。安全主義者は遂に小壯派を船底に連れ込むだ。

「藪倉庫と云ふ感じだなア」

と倉庫氏職掌柄考へて居る

「水面以下だと思つて懨懨になるなア」

「全くだ」

「變な臭がするね」

「ベッキだらう」

「船酔はこれから始るんだぞうだ」

「そうかも知れぬエ 嫌な臭だなア」

「なんだかも變になつて來た。」

「微候が早過ぎるぜ」

「こんな時女でも居れば好いんだがなア」

「何故？ 介抱でもさせるのか」

「いや俺は女が來ると總ての生理的惡現象が解消しちやうのだ」

「嫌な奴だね 自覺して居るんだから」

でもそう言へば一人も居ないね

「ふゝ氣が付いたかい 實は前からそれを言ひたかつたのだらう」

「そんな事あるものか」

「それそれその言譯する面が……」

「止せよ」

「心配するなよ その内に來るから」

「來るかねエ」

「屹度來る。俺には判るんだ。過去のあらゆる場合に俺の豫感はずれた事が無い。」

「ガツチリしてやがるなア」

グラフ氏は東西番付に張出大關位の格なんだから今更例を擧げて説明するまでもあるまい。倉庫氏の言ふ通り全く藪倉庫の感である。水平線以下なんだから勿論換氣作用を起すにも窓が無い。唯上からの入口がある丈である。まあ壺の中へ入つて居ると思へばいい。

暫くすると頭痛がして來た。思考するに空氣の炭酸ガス含有量が増加したらしい。それに入つた當時より

温度も増し温度も昇つたらしい。その有様を他に例をとつて説明するなれば生繭をそのまゝ倉庫に貯蔵した如くである。人間とて蛹と同じく蒸熱を出す。

一八條氏と自分は一行から一組の夫婦を狭むで陣取る。以下夫婦の内密話である。

「煩さいわね あんた」

「うん」

「何とかならない」

「何とかならないつて言つたつて」

「これじゃ寝られやしないわ」

「寝なくたていさ」

「だつて私疲れて居るのよ」

「困るな」

「あんた」

「あんた もう寝たの？」

「うん」

「呑気ね……あら坊やは？ あんた」

「さつきそこに居たぜ」

「あんた薄情になつたわね」

「止せよこんな所で」

「だつて 二年前とは變つたわね」

「そうですか そう見ればそれまでさ」

「来るんぢやなかつたわ」

「強請んだのはお前じやないか」

「だつて私 二年前のあの頃を想ひ出したからよ……でもあんな事夢

ね あの時ばかりで貴方はもつと親切だつたわ 瀬戸内海を通つた時は

好い月夜で波も無く春風が闇を通して私まだ覚えて居るわよ ひそひそ

吹いて居たわね あの時語り」

「止めてくれよ それが今ぢや不親切になつたと云ふのだらう 理由は

簡単さ。釣つた魚に餌をやる奴があるかいと云ふ丈だ。」

謹啓

初夏の候益々御清榮の段賀上奉り候

際者愚生上田蠶絲専門學校在職中は格別の御愛顧を蒙り誠に有難く、感謝罷り在り候今回同校を辭し岐阜縣農林技手を拜命同縣蠶業試験場勤務を命ぜられ候につきては今後とも相變らず御指導御鞭撻相仰ぎ度く伏して懇願奉り候先づは取敢へず紙上を以つて轉任の御挨拶申述べ度斯の如くに御座候 敬具  
岐阜縣長良蠶業試験場  
北澤 周一

### 轉任御挨拶

滋賀縣に縣農會及縣を通じて満十ヶ年半居りました斯様に永い間勤め得られた事は各位の厚い御同情と御指導に據るものぞ存じ深く御禮申上げます今回滋賀縣を退出を命ぜられ農林課勤務となりました何卒將來も従前同様御厚誼と御指導に預り度く誠に乍失禮時報の紙面を拜借し御挨拶申上げます

昭和八年五月廿五日

石川縣内務部農林課

石原 石 司

嗚呼自分は此所にも又結婚の喰ひ荒された骨を見る。

「おい隣りぢやどうやら喧嘩になつたらしいね」

「うん 男つであゝも薄情になるかな」

「なアに戀愛と結婚の軌道を間違ひ無く歩むで居る方き順調の方だよ」

「そうかなア それはそうと子供は居たのかなア」

「居たんだらう。足もとで寝てるよ」

「あれが愛の結晶かよく見ておけよ自分と一八條氏は一行から離れて居た爲めにこの間に一行の側に起つた事件を見逃したらしい。夫婦の頭越に見るとあれ程努力し血みどろで奪取した席を三人の女性にとられて居る。」

「どうしたい」

と横目で眺め乍ら云ふと

「なアに……」

とN氏もM氏も喜悅の情を満面に表現して居る。グラフ氏に至つては

「御酌を頼むで一杯いかな」と、何時の間に飲むだのか大部い御機嫌である。

「どちらからです」

「東京からよ」

「いや東京は分つて居ますよ 東京はどの邊です」

「……」

「言つたつて好いぢやありませんか「あんた刑事なの」

「や、こりやキツイお言葉ぢやさでは後暗いところがありますな」

「知らないわよ」

この調子では仲々の強者であるわと思つて居ると後の方で「女給らしいな」と云ふものがあるので振返つて見ると關稅氏である

「どうです」

と感想を叩くと

「いやア」

と單純に歡喜して居る。女がしかも女許り三人で三原山へ行くなんて非調和的行爲である。だがそれ丈にその存在と云ふより出現は吾々にとつて否同じ部屋に頑張つて怨嗟の眼を見張つて居る野郎共にとつて實に「よき慰安」の源であつたに相違ない。

煙草の煙は行き場につて停滯して居る。部屋に向ふ側が春霞のかゝつた様に見える。これまで煙草にバツト十箱は完全に消費されて居るだらう。もうこうなると煙草は必要である。この部屋に入つて居る事は喫煙する事と同じ効力がある。威勢の良い鯉が建板の上に乗せられた時の様に口をパクパクして居れば好い。

「煙草は御互に止めませう」と、何所かで禁煙氏が悲鳴をあげる。もうこうなつたら遅い。自分で身を避けるより他に方法は無い。迂闊に窓でも開けたら水葬になる。

先程の女三人平氣で居る所を見るに突張り場末の女給であるらしい。敢て場末と云ふのは、その服装や比較的粒揃ひの明眸よりすれば或は否定さるべきであるが、カフェーでも余程建築の悪い場末のもので無いとこも煙に耐久力のある女給は養成されないものである。更に一步を進めて他方面から觀察すると場末の女給は客の財布調べをやるから、そのためには客に煙草を買わせて見る必要があるから客の煙草を空にするために自然喫煙を始めるのである。それも決して味と意味での喫煙で無

いから煙草に對する彼女等の抵抗力と云ふものは生活のための一つの必要條件である。

自分が他の大方の諸賢と意見を異にして彼女等を敢て場末の女給と呼ぶのは決して滑稽無形の故無き言では無い。

奴小生も頭がふらふらして來たので部屋を出て甲板へ出た。

船は何時の間にか崖壁を離れて居る。が今は動いて居ないらしい。仰時出發するの自分には知らない。その中に居るだらう。(未完)

### 豚の脳味噌

蕉

項目、奉天に獸疫研究所を訪ね陳列標本中の條虫の中間寄生を受けた豚の脳味噌を見て一驚を喫したのである。寧ろ、その時の感じからすれば將に慄然としたと云つた方が當つて居るのである。

その標本によれば丁度大豆大の囊虫(條虫の中間寄生体)が脳味噌の全体に亘つて殆ど一極立方に一個位の割合に喰ひ入つて居るのである。従つて斯ふした場合の筋肉の有様等は一寸正面には見度く無い代物である。

丁度標本の断面の有様は臍出し人造花崗岩のアレだと思へば間違ひが無いのである。

これだけでは或は驚かぬ人もあるかも知れぬ。だが説明によると以上位の寄生程度のもので豚自身としては健康も衰えず、榮養も悪くならず、勿論氣が狂ひもせず結局外部からの診斷では専門家の目を以つてしても全然寄生を受けぬものとの區別がつかぬと云ふ。

吾々は此處で豚自身の鈍感さと、ノロマさとを嘲笑したがるのであるが一面、彼れ等の健康さに驚嘆してやる事も忘れぬ方がよいと思ふ。勿論中間寄主体内に於ける該虫の特殊生態的意義は別としてだ。

或はこの神經的に驚くべき豚馬(頓馬)さが豚の特殊地位を家畜乃至は一般動物界に置くものとすれば、これと Synonymous な考へ方によつて吾々人間社會に於ても同一の範疇に入れべき人々の一群を發見出来るやうに考へられて一寸面白いと思ふ。

「長襦袢も見ずに藝者を口説く……それじゃまるで闇夜に礫……」

私は斯んな言葉が好きなのでサテこそ鏡花宗の末流の信者なのだが、此處の處をアル大學出の先生に讀んで聞かせて「それは何の事だい?」なんて味も素氣も無い高麗飯並に扱はれてガツカリしたことがある。

恐ろしい事には滿洲の斯んな田舎にもダンスつて云ふ熱が傳はつて來たのであるが、一時私達の周圍にもこの新時代の空氣に觸れた幾人かゝ生れた時に誰も悪いとも何とも云はぬ先にそれ等の人々から「ダンス神聖だとか、家庭娛樂の何とか」と云ふ御高説を聞かされたものである。

處で此處に一人、カフェー、ダンス、ホール、待合の類なら大連、奉天、新京の目星しい處なら何處でも指呼の中にありと云ふ若き通人があるつて、曰く「要するに雞のコート、シツプと同じだよ!」と云ふにも拘らず感受性のフレッシュなるべき筈の先端人からイトも眞面目に「ダン

スは實に高尚なもので、藝術的なもので」なんて聞かされると斯んな時に一寸前記の豚の脳味噌の標本が頭に浮んで來て仕様がなないのである。

云はない事だ。蛙が家鴨に銜へられたやうな格恰は想像しただけでも余り良い景色ぢやないと思ふ。要は感性の問題であり、豚の脳味噌

### 製絲科三學年校外實習派遣工場及學生氏名 (昭和八年度)

所 在 地	工 場 名	學 生 氏 名
熊本市内坪井町	肥後製絲株式會社	大久保 直
熊本市外島田	徳島小口製絲所	林 正
兵庫縣養父郡大藏村	日東製絲株式會社和田山工場	太田 克三
徳島縣鳴門町	徳島小口製絲所	市 原 文雄
京都府綾部町	新綾部製絲株式會社	熊谷 俊三
岡山府岡田郡二宮町	新綾部製絲株式會社宮津工場	副 田 好美
兵庫縣養父郡養父市場村	同	松 浦 彰義
同 水上郡成松町	同	池 田 爲雄
岐阜縣加茂郡古井町	同	三宅 富榮
島根縣今市町	同	高 橋 英次
三重縣津市	關西製絲株式會社	西山 德一
同 阿比町	三 龍 社	大 岩 次
愛知縣中津市	木曾川製絲株式會社木曾川工場	中 會 根 誠
大分縣中津市	豊中製絲株式會社中津工場	清水 常雄
岐阜縣大上郡河瀬村	日東製絲株式會社岐阜工場	林 英雄
滋賀縣大上郡河瀬村	日東製絲株式會社岐阜工場	新 野 武雄
和歌山縣那賀郡粉河町	岩林製絲株式會社	新 野 正一
愛知縣安城市	愛三製絲株式會社	瀧 澤 雄
島根縣平田町	日本製絲株式會社平田工場	松 野 剛彦
熊本市下益城郡河江村	岩林製絲株式會社小川工場	森 剛次
神奈川縣足柄上郡金田村	牧野製絲株式會社	金 丸 賢功
都之城市	日東製絲株式會社都城工場	白 井 四郎
愛媛縣周桑郡丹原村	愛媛製絲株式會社	田 井 岡 實
香川縣木田郡川添村	植村製絲株式會社	小 井 戸 英二
佐賀縣三養基郡基山村	全基山製絲株式會社	横 澤 平
福岡縣二日市町	昭榮製絲株式會社二日市工場	一 之 瀬 茂
高知市上本町	片倉製絲株式會社高知製絲工場	牛 草 榮喜
大分市大道町	同	坂 入 長治
長崎縣諫早町	諫早製絲株式會社	益 田 誠正
鹿兒島市	薩摩製絲株式會社鹿兒島製絲工場	大分製絲株式會社

嬢や御夫人ならば、月々の主婦の友でも讀むで外國の映畫俳優の名前の二つか三つ知つて居れば間違ひなくインテリ様だと考へてやつても良いと思ふけれど男の場合だととなると早い話が前に述べた鏡花のアノ言葉の面白味も理解し得ず何がインテリだと云ふ考へ方もあると思ふ。

然し事實上吾々の社會でインテリ層に屬する人々として公認せられて居る一群の人達の中に鏡花の言葉の面白味等全然通用しない世界の存在する事は明な事だし、して見れば鏡花の世界の面白味を知る——或は鏡花に限らず廣い意味で藝術的感興乃至感受性の所持と否とはインテリ層の類別には役立たない。

普通には學校教育を受けた年數によつて定義するものらしくもあるが心の動き、物の考へ方の余りに物理的、機械的な場合には一寸率に難い場合も無いでもないし、時代の空氣の浸み込み加減に重きを置くとするといふインテリらしくなつて來ると云ふ次第である。

たゞ此處に面白い考へ方が無いでもない。それは動物界に於ける豚の脳味噌の存在である。インテリ等と蒼白く考へる必要は少しも無い。

「頑健なる人々」細かい事、ケチ臭い事、夢の世界、詩への憧れ總て斯ふした世界を勇敢に(或は無意識に)ネグレクトして行く人々の世界を考へれば良い譯だ。

それは人間社會に於ける裝甲自動車であるし一寸面白く云へば豚の脳味噌である。

處で時代が非常時であり右手萬能

### 大阪千曲會記事

の昨今であつて見ればタンクは實に必要である。たゞ例の豚の脳味噌を生で喰ふと危険だと云ふ。

二五八三・五・二一稿

近年大阪地方在住の母校出身者が次第に増加して來た。今年の如き又六名の新卒業生を迎へ既に市及府下を通じて廿余名を數へるの勢である。

纖維業を旗幟に對する母校の息が紡織業のセンターたる當地まで進出したとて何の當りませぬ事かも知れぬが、然し次第に伸びゆく母校の勢をみて今更心強さを禁ぜられぬ次第である。

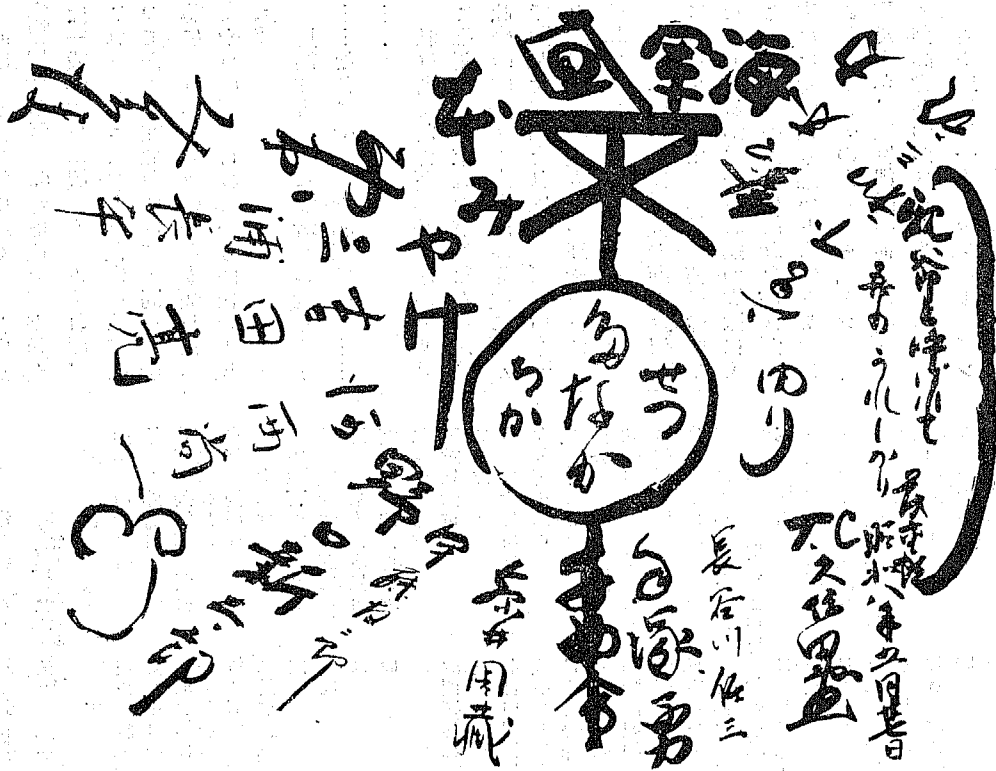
土地柄當地在住の同窓生は大部分紡織或はそれに縁ある仕事に従事してゐるのであるが然し夫々皆繁忙な職務にたづさわつてゐるために同じ土地で同じ仕事とは云ふものゝめつた談合の機會はななく中には名前だけはきいてゐるがどんな人だか顔も知らぬと云ふ様な事さへもあつたのである。

それが今度日本紡の田中氏(絲一回)や當市で獨立紡績機械商をやつてゐられる伊藤氏(紡二回)等の幹旋で一夕會合して大いに親睦を増すの機會を得たのである。即ち六月廿七日午後五時から當市道頓堀の本みやけに於て千曲會大阪支會の懇親會を開催して懷舊談心ゆく日頃の勞苦を慰し且會員相互の提携親睦を培ふたのである。

當日の參會者は

田中一男(絲一、大日本紡)高田茂重郎(絲一、日本絹織)久保田一徳(絲四、東洋紡)藤井周藏(蠶六、自宅)河西尚一(紡二、紡織雜誌)伊藤友次郎(紡二、紡織機械商自營)吉田高(紡七、工業獎勵館)三

張中の野口新太郎氏を加へて總勢十四名であつた。今まで當地で斯様に多數の同窓相會したのは初めての事であつたので、中には全く初對面の者も多く尙出席者の顔振は古くは母校初期時代



浦長平(紡九、北泉紡)西村盈保(紡十、高槻絹織)鈴木力(紡十二、柏原紡)手塚勇(紡十二、貝塚紡)長谷川任三(紡十二、東洋麻絲)宮下和三郎(紡十二、新興毛織)

の卒業で今や堂々業界の要職に活躍される高田、田中、久保田等の諸先輩紳士から、新しくは今春母校を巣立つたばかりのまだ學生氣分の抜けきらず諸君なので、初めのうちは何だか一寸きこちないよそゆきの態た

らくであつたが、そのうち次第に酒も廻り話題が昔の上田時代に飛んでゆく時分からは全く打ち解けた水入らずの集ひとなり、やがては期せずして一同から懐しい母校の校歌が出る、そのうち木曾ぶしが出る、伊那節が出る、さては菅平小唄やスキー節から更に母校名物の應援拍手等まで飛び出す有様、一同十二分の歡を盡して田中氏音聲で母校及千曲會の萬歳を三唱して散會したのは午後十時半頃であつた。因みに此處に掲ぐるは當日千曲會本部に對し會員の認めた寄せ書である。

通信

神戸扇港便り  
(古谷教授を送る)

拜啓謹案の候愈々御多祥の段率大賀候

陳者五月十日附御通知に依り今回母校古谷教授が在外研究員を命ぜられ五月十八日鹿島丸にて當神戸港より渡歐の途につかれる旨を初めて承知仕り候。古谷教授御自身は勿論母校の爲め誠に慶賀の至りに存じ茲に御祝福申上げる次第に御座候、因に當港より斯かる意味で母校諸先生を御見送り致し候ことは今回で六回目かと記憶致し候、第一回阿形先生、第二回原田先生、第三回佐藤(春)先生、第四回和田先生、第五回岡先生第六回が今度の古谷先生に御座候、尤も其の間遠藤先生を御迎へ致し候ことも有之候、斯く並べ立て候へば恰も當地は母校教授御來遊御出發港の如き觀を呈し昂高き次第に御座候。但しよく見受け候神戸港埠頭別

れの悲劇が更に御座なく御報告申上ける材料なきは申譯なき淋しさに御座候、然し之は或は諸先生が露骨なる表情を上手に慎まれ表現せられな

靜かに埠頭を離れ萬歳萬歳の聲と共にテープは次ぎ／＼と切れ目出度船の人としての渡歐の途につかれ申候 敬具  
五月廿六日 洲 溝 生  
千曲會御中

千曲會日誌

五月八日 在田有志同窓生主催にて岐阜縣農林技手に榮轉せられし北澤周一氏の送別會を市内小濱屋にて開催せり  
五月九日 古谷教授在外研究の爲め渡歐せらるゝに付き解纜港の兵庫千曲會長沖瀧治氏へ敬送方依頼せり  
五月十日 蠶絲學雜誌第五卷第三號編輯に付内務省へ納本せり  
同日 岐阜縣へ赴任せられる北澤技手を上田驛にて見送りせり  
五月十六日 在外研究の途に着かる古谷教授を上田驛にて見送りせり  
五月二十七日 故小澤勇氏(蠶十三)の遺族へ本會有志より弔慰金二十圓を贈呈せり  
五月二十九日 宮崎千曲會會長廣瀬清四郎氏退任富岡泰氏就任せる旨通知あり  
五月三十日 福島千曲會會長田附一郎氏會津農林學校へ轉任に付き都合上當分の間萬石安太郎氏が會長事務を代理せらるゝ旨通知あり  
五月三十一日 母校生理學實驗室に於て本會事務執務上に關し諸般の打合せを行へり

同日 新潟千曲會會長二宮九二二氏より新潟縣中書原郡五泉町在住の丸山武夫氏(新潟縣農事講習所勤務)が同町火災の際焼ける旨通知あり  
六月二日 五泉町の大火に類焼の災禍を蒙りし丸山武夫氏に對し本會より些少の見舞金を贈呈せり



敘任辭令

昭和八年 四月六日	茨城縣立結城農學校教諭ニ補ス	公立實業學校教諭	中山 鑑一
同 四月七日	賜三級俸	上田蠶絲專門學校教諭	井上 柳梧
同 四月十日	地方農林技師ニ任ス 高等官七等ヲ以テ待遇セラル	陸軍歩兵少尉正八位 長野縣農林技師	金崎 眞英
同 五月一日	七級俸當分千下賜(四月十日) 七級俸六百圓下賜(福島縣)	公立實業學校教諭	田附 卯一郎
同	陸シテ高等官四等ヲ以テ待遇セラル	地方農林技師	田中 福雄
同	同	同	大名 昇
同	同	同	菅原 勇治
同	同	同	佐藤 良太郎
同	同	同	坂田 榮雄
同	同	同	高島 秀男
同	同	同	船後 勇平
同	陸シテ高等官六等ヲ以テ待遇セラル	公立實業學校校長	佐谷 健次郎
同	長野縣上高井蠶業學校校長ニ補ス	公立實業學校教諭	飯島 正胤
同 五月十日	七給俸當分千下賜	公立實業學校教諭	牧野 金治郎
同 五月十日	同四月十一日ヨリ年功加俸年額二百十六圓下賜	公立實業學校校長	佐谷 健次郎
同 五月十五日	七給俸下賜	公立實業學校教諭	後藤 幸一
同 五月十五日	年功加俸年額百九十二圓下賜(三月二十四日岐阜縣)		

住所移動

箕輪貞三 遷一 上田市新夢町  
中山鑑一 遷三 結城農學校(茨城縣結城町)  
桑田庄七 遷八 和歌山縣蠶業試驗場(伊都郡應其村)  
石原石司 遷八 石川縣農務部農林課(金澤市)  
安島義夫 遷九 滋賀縣農務課(大津市)  
中島文雄 遷九 京都郡農會(福岡縣行橋町)  
柏倉豐吉 遷九 岐阜市長良西町  
北澤周一 遷十 岐阜縣蠶業試驗場

(岐阜市外長良村)  
佐藤雄次郎 遷十一 昭榮製絲株式會社本社工場(埼玉縣本庄町)  
永井勝末 遷十四 全國蠶種組合聯合會(東京市麹町區有樂町蠶絲會館内)  
大崎征内 遷十四 黃海道蠶業取締所(自宅黃海州邑上町一〇〇/四)  
小山哲夫 遷十四 長野縣北佐久郡北木井村  
西本朝平 遷十五 那須製絲株式會社蠶事所(京都府綾部町)  
太田 元 遷十八 靜岡縣蠶業取締所濱松支所(濱松市)  
市川龍哉 遷十八 瑞穂精舍(松本市外波田村)

岡本正男 遷十九 (岡山縣和氣郡三國村)  
赤池勝男 遷二十 長野縣蠶業取締所豊科支所(豊科町)  
吉田太郎 同 長野縣蠶業取締所上田支所(上田市)  
村山良義 同 福岡縣蠶業取締所(糟屋郡箱崎町原田)  
矢野宗彦 同 同右  
寺島一太郎 同 片倉製絲紡績株式會社一ノ宮工場(一ノ宮市)  
原 治夫 遷二十 群馬縣蠶業取締所尾島出張所(尾島町)  
清宮 保 遷一 東京市本郷區西片町一〇番地ノ二七  
清水二郎 遷一 横濱市中區大岡町一、九六八  
木内保平 遷二 木内商店(横濱市神奈川區四ノ四九) 自宅横濱市西戸部字堤谷一、六六五  
山本 謙 遷二 片倉製絲紡績株式會社(福島縣平町)  
岡田康三 遷三 京都府竹野郡豊榮村松尾順策 遷四 片倉製絲紡績株式會社試驗所(埼玉縣大宮町)  
菅井辰三郎 遷四 福島縣相馬郡中村町父母仙藏 遷四 肥後製絲株式會社玉名工場(熊本縣高瀬町)  
手塚芳太郎 遷五 石西社(島根縣鹿足郡日原村)  
吉開亮一 遷七 商店(横濱市太田町一)  
梅澤萬治郎 遷七 日東製絲株式會社和田山工場(兵庫縣和田山町)  
北本重郎 遷八 湖山工場(鳥取縣氣高郡湖山村)  
大根田五一郎 遷八 東京市澁野川區田端一、七五八  
堤 玄 遷九 西條蘭檢定所(愛媛縣西條町)  
大谷 勇 遷九 更級社(篠ノ井町)  
緒方良純 遷十二 那須製絲株式會社

社倉吉工場(鳥取縣倉吉町)  
塩入國治 遷十三 上田市辦天前村田信宜 遷十三 昭榮製絲株式會社沼津工場(沼津市)  
望月榮作 遷十三 鐘紡大淀製絲工場(宮崎縣大淀町)  
小平光雄 遷十三 舊姓 武井久保田松藏 遷十四 美濃乾蘭組合(岐阜市外島村)  
杏掛 聰 遷十六 郡城市役所(郡城市本町)  
兒玉徳入 遷十七 味澤製絲所(長野縣諏訪郡漆谷村)  
荒木康男 遷十七 金羅南道是製絲株式會社(全南光州郡光州邑泉町六〇)  
福島喜藏 遷十八 群馬縣澁川町上ノ町二、〇二二町三郎方  
須永 茂 遷十八 群馬縣安中工場(群馬縣安中町)  
山崎曾録 遷十九 北海道蠶業取締所(札幌市北四條西四丁目)  
田ノ上忠義 遷二十 日東製絲株式會社(横濱市中區本町)  
井田英夫 遷二十 神戸紡績製造株式會社(神戸市葺合區協演町一)  
萱野 恒 遷二十 三重縣立蠶絲學校(度會郡小俣町)  
松村憲一 遷二十 那須製絲株式會社美濃工場(岐阜縣古井町)  
伊藤 猛 遷二十 群馬縣商會(高崎市飯塚)  
木曾信雄 紡十一 氣球隊第二中隊千葉縣都賀村)  
星田 馨 紡十二 桐生稅務署(桐生市)

宮崎千曲會長交迭

宮崎千曲會長左の通り交迭せり  
宮崎千曲會長  
(新任) 富岡 泰氏  
(退任) 廣瀬清四郎氏

福島千曲會長代理

福島千曲會長田附卯一郎氏會津農林學校へ轉任の結果當分の間萬石安太郎氏が會長事務を代理せらる

故小澤勇氏弔慰金

金壹圓也  
三輪 貞徳 野澤 司馬作  
宮本 豊彦 佐藤 金六  
西本 朝平 原 茂  
吉田 隆雄 安部 和  
宮川 繁治 山崎 壽  
矢島 良雄 關 兄  
金貳圓也  
内藤 良雄 沼田 周造  
尾崎 省三 加々井 精喜  
合計 金貳拾圓也  
遺族贈品料 金貳拾圓也  
上田蠶絲專門學校千曲會

編輯室から

今月號も千曲時報の原稿は少いので殊により六頁として発行しなければならぬかと思つて居りました。處が本日原稿を纏める日に居人生から長編の原稿を頂いたので急に十頁に改める事と致しました。

例年の如く製絲科三年生三十名は六月一日夫々上記工場に入場いたしました。最も御繁忙の折柄ではありますが弟達を適當に御指導下さる様御願ひいたします。

今迄本誌編輯の爲めにお盡し下さった北澤周一氏の後任としては今回金澤勇氏をお願ひ申しました。